
夢想花

ことみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢想花

【Nコード】

N6705Y

【作者名】

ことみ

【あらすじ】

日本から宋の国にとばされ、国の重鎮のもとで生活していた神崎鈴音。ある日、彼女を訪ねてきた国の王太子の願いとは、彼女が正妃候補として王太子宮で暮らして欲しいというもので・・・！？

プロローグ

ここは宋の国。私の名前は神崎^{かんざき} 鈴音^{すずね} 18歳。日本の女子大生をしていた。専攻は幼児教育。いずれ幼稚園の先生になりたいと思っていたものだ。しかし、現実はそのではなく宋の国にトリップしてしまい困り果てていた私を、宋の国の重鎮である、李^り 斉蓮様^{せいれん}に保護され、養女にしてもらった。斉蓮様は優しく、温厚なお方で、本当の父のように思っている。

「鈴音様^{すずね}。旦那様^{だんなさま}が呼びにございます。ご足労いただけますでしょうか？」

「ええ、ありがとう、琉香^{るか}。それでは、支度をしなくちゃね。お願いできるかしら？」

かしこました、と琉香は私の支度をしていく。ここでは、養女の私でも当主である斉蓮様にお会いするには略式の服装にならなくてはいけない。私のお世話係は何人かの侍女がいるが、筆頭^{ひだり}は琉香だ。彼女は私と年も近く、いつも付き従う筆頭の侍女だ。今日もいつものごとく衣装を選び、丹念^{たんねん}に化粧を施し、琉香の先導のもといつものように、斉蓮様のお部屋へ向かう。よく話すことが多いけど、こんな朝早くからお呼びなんて珍しい。なにか、あつたのだろうか？

「琉香。朝早くのお呼び出しのこと、何か聞いている？」

「それは、旦那様自らご説明されるそうですわ。お早くいきましよう」

「わ、わかってます。まだ、衣装の裾が長いのに慣れないんだもの……」

略式の衣装といえど、上質の布が使われている。この国の女性なら

普段着なのだろうけど、私にしてみたら普段着からおしゃれに入るけどなあ。そうこうしてるうちに、斉蓮様のお部屋についた。先触れの琉香が、伺いのノックをする。内からどうぞ、と声がかかりゆつくりと扉が開かれる。眩しい光の中、斉蓮様と・・・もう一人、若い男・・・？

「失礼します。鈴音様をお連れ致しました」

「ご苦労、琉香。さがってくれ。あとでまた呼ぶから」

「承知いたしました。何かありましたら、お呼びくださいませ。失礼いたします」

そういったやり取りの後、琉香は下がり、部屋には斉蓮様と私と、若くて気品のある男の3人に。みるからに威厳のある顔立ちや雰囲気だけど、今までに見たことないけどなあ・・・？一応、淑女の礼をとり挨拶をする。

「お初にお目にかかります。李りせいれん 斉蓮が養女、鈴音すずね にございます。

本日はお越しいただき誠に恐縮でございます」

「いや、急にきたのはこちらの方だ。朝早くにすまないな、斉蓮、

鈴音」

「いいえ、我が君。行啓ぎょうけいいただき、感極まっております。本来なら、こちらから行かねばならぬところを・・・」

深々と我が君、と呼んだ方に臣下から君主にする最高礼をしてるのを見て、目の前の男が高貴なる身分であることがわかる。行啓、というのは王妃・王太后・王太子。王太子妃が外出することをいう。行幸ぎょうこうが王が外 出することをさすみたいだ。詳しくはわからないけれど。。

「鈴音。こちらのお方は、この国の王太子、緋ひしらん 紫蘭様。御年20

歳であらせられる。

御存じだね？」

「はい。もちろんにございます。それで、私がよばれたのにはどのような理由がございましょうか？」

「それは、私が申そう。鈴音、そなたに頼みたいことがある」

「頼みたいこと、にございますか……？」

やんごとなき身分の方が、重鎮の屋敷にきて、その養女に頼みごと……？ いったいどんな頼みごとなんだ。なんか、想像つくけど、なんか聞きたくないような……

「そうだ。そなたに、しばらく王太子宮で暮らしてもらいたいのだ」

「……聞いてもよろしゅうございますか？」

「堅苦しいのはよせ。そなたも、言葉遣いに慣れぬ様子。くだけた物言いでかまわん」

なんでわかった、と言いたいが相手は偉い身分の人。くわえて、養父は国の重鎮で私を保護してくれた人。くだけていっていつてくれてるんだ、それでいいじゃないか。

「では、失礼して。どうして、そんな大事なことを私に？ もっと、ふさわしい人とかいないんですか？」

「頼みたくとも、腹のわからぬやつばかりでな。斉蓮が保護している女性がいるときいて、人柄などを日々聞くうちに、そなたならと判断した。国の重鎮たる斉蓮の養女たる鈴音に、王太子宮で暮らしてもらう。もちろん、正妃候補としてだ。よろしく頼む」

よろしく頼む、って拒否権は……ないわよねー。あつたら、こんな朝早くからよばれないはずだ。仕方ない、斉蓮様に迷惑はかけれない。暮らすだけならいいわよ、暮らすだけなら。候補なら、あ

とで理由つけて帰れるだろうし。そう思っていた私の考えが大きくくつがえ覆されるとはこのときは思いもしなかった。

プロローグ（後書き）

初書きです。応援よろしくお願いします

1・王太子宮へ

先日、宋の国の王太子である 緋ひしらん 紫蘭様がこられて正妃候補としてあがつてほしいといわれて紫蘭が帰ると、すぐに家令の 江來しやうらいを始め、使用人たちが主である李り 齊蓮せいれんの名に恥じぬよう、とぬかりなく輿入れの準備をしていく。他に何か言われるようなことがあつてはならない。慌ただしく数日がすぎ、輿入れの日となった。

「鈴音様すずね、本日のめでたき日を迎えられましたこと、我ら心よりお祝い申し上げます」

「ありがとうございます。皆さんも、短い間ですが、お世話になりました」

「ありがたきお言葉、しかと頂戴いたしました。琉香るかをお連れください。王太子宮へそば仕えの者をひとり連れてよいと、お達しがありましたので」

琉香が前に進み出て嬉しそうに微笑む。よかった、彼女にはついてきてもらえたらと思っていたし。見ず知らずの世界で、親しいといえるのは養父である齊蓮と琉香だけなのだ。婚礼の行列は厳かに、王太子宮へと出発したのだった。長い行列にほう、とため息がもれる。

（日本の花嫁行列みたい・・・おばあちゃんが、言ってたっけ。すごく長い列だったんだって）

鈴音はそんなことを聞いているだけで見たわけではない。しかし、それを彷彿ほうふつとさせるものが、婚礼の行列にはあった。流れゆく景色の中で、前方にひとときわ大きい建物が見えてきた。きっと、あれが王宮なんだろう。

「もうすぐですよ、鈴音様。つく頃には紫蘭様とお会いできると思いますわ」

「そうね。・・・にしても、この花嫁衣裳、派手すぎないかしら？こんなもの？」

「ええ。紅の衣装はお気に召しませんか？よくお似合いですよ。ああ、降りるときには裾を私が後ろよりたくし上げますから、ご安心くださいませ」

につこりと微笑まれて、う、と言葉につまってしまふ。元々、おとなしい性格の鈴音だ。やさしく言われるといやとは言えない。そうこうしているうちに、行列は王太子宮へとついたようだ。鈴音たちが乗る軒がゆつくりと、止まる。落ち着いてそうつと降りる。後ろはまかせて大丈夫だ。

「ようこそ、鈴音様。我ら一同、今日この日を心よりお祝い申し上げます」

一糸乱れぬ呼吸で王太子宮へ仕える者たちが跪く。最高礼をもって迎えられた。緊張のあまり言葉につまりそうになるが、口上をのべる。

「ありがとうございます。今日よりお世話になる李　鈴音にございます。よろしく」

「鈴音！来たか、待ちわびていたぞ！」
「きゃっ」

体が軽くなった、と思ったら突然現れた紫蘭に抱きあげられていた。正装に包まれた紫蘭はいつもより色気があり、はにかんだ笑顔に一瞬、どきつとした。顔に朱がはしるのがわかる。

「び、びつくりするじゃありませんか、紫蘭様」

「紫蘭でいい。私たちはこれから毎日、顔をあわせるのだから。あ、今までお前という存在を知らずにいた日々はなんともつたいないことか。だが、今日からは違う。私は鈴音という至宝を手に入れたのだから」

「し、紫蘭様……」

「紫蘭でいいと、いつておろう」

ちいさく、紫蘭、とつぶやくと彼はそうだ、と頷いた。今までこのような過剰にスキンシップや言葉をかけられたことがないのに、これがいざらう続くのだろうか。嬉しいようななんとも複雑な気持ちになった。

2・紫蘭との再会

紫蘭との再会の後、まずはお茶をとということになり、鈴音がこれから住む部屋に案内される。部屋につくまでの間、鈴音はずっと紫蘭の腕の中にいた。・・・正確には、いるように言われた、だが。おろして欲しい、というところのままでよい、と返事が返ってくるため二度ほどそのやり取りをした後、諦めたのだった。

「ここが今日から鈴音が生活する部屋だ。気に入ったか？」

「わあ・・・すごい！！ここで今日から生活するのね。ありがとう、紫蘭」

「なに、このくらいのこと。そなたの輝く笑顔を見るためなら、できることなんでもしてやる」

緋色の瞳が柔らかく細められ、愛しげに見つめられて、あわてて俯く。頬に熱が集まるのがわかる。そんな風に熱い視線をおくられたら、どう返していいのかわからない。頬に両手をあてながら、鼓動が静まるのを待つ。

「もう。そんなこと言って、私が無理なこといったらどうするつもりなの？」

「叶えられるなら、叶える。だが、鈴音はそんな女性ではないと、わかってる」

「あ、ありがとう・・・」

嬉しい。斉蓮から聞いているとはいえ、そこまで信頼してくれるとは。そこへ、今まで控えていた琉香が、花茶を持ってきた。花茶はもてなしのお茶で有名である。お茶の中で、少しずつ花が茶の中で開いていくのが有名だ。

「これが、花茶なのね。．．．うん、おいしいわ。これは、紫蘭が手配してくれたのかしら？」

「ああ。そなたを歓迎する、ということを知ってもらいたくて花茶でいい表せるわけではないが。改めて、李 齊蓮が養女、鈴音。そなたを正妃候補として、心より歓迎しよう」

紫蘭は鈴音を見つめながら、艶然と微笑んだ。心臓が跳ねたのがわかる。紫蘭の微笑みは心臓に悪い、と思う。そんなこといったら、何が待ってるかわからないから、いつてあげない。でも、彼の笑顔を近くでみれるのは、今私だけ．．．この幸せが長く続きますように。

2・紫蘭との再会（後書き）

王太子宮編にはいります。齊蓮様、いつ再登場にしようか。頑張ります！

3・憩いするとき

2人きりで落ち着いたところで、王と王妃に挨拶しにいかなくてはいけない、と紫蘭に言われた。今日は疲れているため、明日の朝とのことだった。未だかつてない経験に、会ってもいないのに、緊張してしまう。それをみてとった、紫蘭が意外な行動に出た。

「なにを思いふけている？今、目の前には私がいるというに、他の者のことを考えているだろう？・・・面白くない」

「！だ、だからって、いきなり抱きしめて、ほおにキスはびっくりするよ。し、しちゃだめってことじゃなくて」

「私は、明日の謁見のことについて、考えてただけなのに・・・」

「そう気追うな。自然体の鈴音が、父王達も喜ばれる。そうだ、先にいっておくことがある。謁見で私の弟にあうことにもなるからな」

「弟・・・第2王子様？」

「そうだ。遙翔つぎしぎ という。今年11歳となったところだ。今年1歳となったところだ。まだやんちゃでな、こちらでも少し手を焼くところだ」

仕方のないやつだ、と笑む彼の顔は親しいものだけにみせるもので、いかに遙翔王子を愛しているかが、わかるものだった。一体どんな王子なのか。私とは打ち解けてくれるのか。その時、紫蘭が席をたったので、服の裾をひいて引きとめた。

「どうしたの、紫蘭？どこかへ行くの？」

「ああ、すまない。これから、残っている仕事をせねばならん。王太子としての務めだ。そなたを正式な正妃とするための手続きも入っている。が、こちらにも少々難題があつてな・・・」

「難題？・・・ってなに？」

「手を焼く相手が一人いてな。相手の家柄が高い分、うかつな行動もできかねるし。知っておくべき権利があるから、教えておく。斉蓮と並び称する家格の家の、娘がいる。　ゆうさな 侑 紗南という。年は15歳。近いうちに、あわせることになるだろう。そのため、候補という形をとったのだ。・・・すまないな。すぐに戻る。夕食は共にしよう。それまで、くつろいでいてくれ」

そういうと、憂いを含んだ目で鈴音をみつめ、そばまでくると抱きしめ、ぽんぽん、と幼子をあやすように頭をかるくたたいてから、紫蘭は仕事へと向かっていった。

「・・・ライバル登場、ってことになるのよね？その子と争うってこと？まだ私、陛下や王妃様にお会いもしていないのに。大丈夫かなあ。ううん、紫蘭を信じよう。大丈夫よ、きっと」

うんうん、と納得して鈴音は紫蘭が帰るまでの時間つぶしを、どうしようかと思い悩んだ。

3・憩いするとき（後書き）

候補とした形の理由を書いてみました。これから大変そうです

4 思案の時間

紫蘭が帰るまでの間、どうするか？少し考えて、情報がやはり足りない。鈴音は思った。今は情報が欲しい。琉香に聞いてもよいのだが、齊蓮に聞いた方がより多くの情報が入るかもしれない、と思い琉香にたずねることにした。

「琉香。齊蓮様は、どうされているかしら？お時間を取っていただきたいのだけれど。お聞きしたいことがあって」

「はい。すぐに手配いたしますが、旦那様にも時間の都合がございます。急ぎであれば、早馬がようございますよ」

「そうね。お願いするわ、謁見の後鈴音がお会いしたいと伝言をお願い」

かしこまりました、と琉香は王太子宮の侍女に後を頼み早馬の手配にいった。その間、窓から王太子宮の外の景色をしてみる。思わず息をのんだ。

（大きい・・・齊蓮様の屋敷も大きいと思うけれど、それと比べても、ううん比べれないくらいに大きい）

「いかがされましたか？ああ、王太子宮の外の景色にございますね。ここからの景色は見ものだと以前、王宮勤めのものに聞いたことがございますわ「琉香。手配ができたのね、ありがとう。お返事はいつごろ、もらえるかしら？」

「そうでございますね・・・今からだと夕食前か途中くらいには返事の早馬がくるでしょう。夕食までの間、いかが過ごされます？鈴音様」

「少し休むわ。・・・思いのほか、疲れてるのかもしれないわ。気

が抜けたみたい。一時間ほどしたら起こしてくれる？」

「ごゆるりと、お休みくださいませ」

返事を聞いてからベッドに向かい、ゆっくりと体を横たえる。すぐに睡魔が襲ってきてまぶたが落ちていく。鈴音は睡眠りの世界の住民となった。自分が思ったより、疲れていたのか、一時間たっても鈴音は起きようとしなかった。琉香が起こすも、起きる気配はなくそれから30分ほどしてから、鈴音は再び目覚めたのだった。気だるげにベッドから身を起こす。

「う・・・おはよう、琉香。いま、何時？」

お目覚めにございますね。よう眠られておいででしたよ。もう、紫蘭様とのご夕食の時間にございます」

「え！？ほんとにつ？？」

その一言で一気に目が覚めた。鈴音の様子に、琉香がくすくすと笑う。それをみて、まだ夕食まで時間があることに気づく。

「もう、琉香ったら。まだ時間あるじゃないのよ」

「ふふつ。申し訳ありません、鈴音様。正確には、あと一時間にございます。それまでに湯あみをして、お召しかえをいたしましょう」

「そうするわ。衣装は、控えめなものにしてね。来るときは少し華やかに感じたから」

「では、そのように。もう湯あみの準備はできてございます。こちらへどうぞ」

琉香の先導のもと、湯あみ処へいき丁寧に体を洗われる。これは、琉香だけでなく、王太子宮の鈴音つきの侍女たちも手伝う。こちらの世界にきてしばらくは、自分で体くらい洗える、と抵抗したもののだが、それが彼女たちの仕事なのだ、とわかるとそのうち抵抗もし

なくなっていた。恥ずかしいのには、変わりないが。そうして、香油のマッサージを終え、今度はクリーム色っぽい衣装に身を包む。優しい印象を与える色合いだ。

「これなら、大丈夫ね」

「お似合いにございますよ。それでは、ご夕食の方は別のお部屋に用意してございますので、向かいましょうか」

「そうね、遅刻はしたくないし。紫蘭が先についてたらいけないし、向かいましょう」

鈴音は、琉香を連れ「食事の間」に向かったのだった。

5・紫蘭の事情

「食事の間」につくと、まだ紫蘭はきていなかった。まだ仕事がお
しているのだろう。鈴音は着席し、紫蘭を待つことにした。

「鈴音様。食前酒の方はいかがなさいますか？桃酒のかるいものに
ございます。うかがってから、ご用意の方をと思ひまして」

「いただきます。ありがとう。・・・あなたの名前は？」

「^{ほたる}蛸にございます、鈴音様。以後、お見知りおきくださいませ」

蛸と名乗った女性は、鈴音より2・3歳年上のようだった。長い髪
を高く結び上げ、凜とした瞳は、意思の強さをうかがわせた。考え
ていると、視線が合いにつこりと微笑まれる。そのとき、紫蘭の訪
れを知らせる声が響き渡った。鈴音が視線をむけると、紫蘭がやや
あわてた様子で、席に向かい着席した。

「待たせてすまなかったな。会議が長引いてしまった、許してほし
い」

「いいえ。仕事はきちんとこなすべきよ。でも、ありがとう。急い
でしてくれたのね、嬉しいわ」

「ああ。まず、食事にしよう。話は食べながらということだな。蛸、
食事の用意を」

「かしこまりました。食前酒は、本日桃酒となっております
ます」

「ああ、頼む」

蛸が後ろ女官に目配せをすると、料理が続々と運ばれてきた。斉蓮
の屋敷で多少、慣れているとは思ったけれど、料理の数やそれを運
ぶ人数はやはり、王太子宮のほうが多くて目をばちばちとしてしま

った。

「まずは、乾杯の方を。初めての食事に、乾杯！」

「乾杯！よろしく願います」

席が離れているため、お互い杯を掲げて乾杯したあと、飲みほす。かるいもの、と聞いていたが思いのほか度数が高く、せき込んでしまふ。大丈夫か、と心配げにきかれ若干涙目になりつつ、大丈夫と答える。どうも、日本の尺度ではかったのがいけなかったらしい。

「食事を共に、と言ったのだが、もちろん初めてここへきたというものもある。これから共食事をと思っているが、聞きたいことがあるだろうと思つてな。すでに、斉蓮にも早馬を飛ばしたそうではないか」

「ええ、そう。斉蓮様にも聞きたいことがあつたし。紫蘭にもよ。あなたからじゃないと聞けないことも、あるはずよ。そうでしょう、紫蘭？」

「わかつている。まずは、軽く食事といこう。空腹では、まわる頭もまわらぬぞ？」

それもそうだ、と思い首を縦に振り、同意の意を示す。そのあとは静かに食事を勧めていく。お互い無言も変だと思つていた矢先、琉香が鈴音の後ろに控え、報告する。

「お食事中のところ、大変失礼致します。旦那様よりの伝言にございます。謁見のあと、控えの間にて会い、話をしようとのことでございます。では、失礼します」

ありがとう、と礼を述べ、紫蘭に視線を向ける。待っていたかのように、紫蘭はこちらをじつと見つめていた。真剣ともいえる視線が、

目があつたとたん、ふつと柔らかな視線にかわる。緋色の瞳が柔らかくなるたびに、鈴音は好きだと思った。彼の表情で一番好きと言えるかもしれない。

「時間がとれたようで、よかった。あやつも、最近は仕事に忙殺されていてな。私でさえなかなか会えぬのだ。・・・さて、私からの話なのだが、よいか？」

「ええ。一番聞きたいのは、あなたからだから。話して、紫蘭」

かちや、とどちらからともなく箸をおき、見つめあつた。

「別れ際に話した、侑家のことだ。私がそなたを話を齊蓮からきくまでは、家柄や表向きの評判から、侑家の紗南が正妃候補の第一にあがつていた。だが、私も父王も侑家をこれ以上のさばらせる気はない。私が将来、王になったときに隣にたつのが、侑家であつてはならないのだ。そこで、信頼のおける李 齊蓮のもとに異国のものが世話になっているときいてな。噂だけでは心もとない。齊蓮から話を聞いてみたのだ。そして、そなたに会いにいった」

そこまで話した後、紫蘭は鈴音を正面から見つめた。自分の探すべきものがみつかった、というような嬉しげな感情をこめて見つめたのだ。思わず、胸に手をやった。熱い視線に、体が少しずつ熱くなる感じがした。

5・紫蘭の事情（後書き）

長くなったので、ここできります

6・不安と甘酸っぱさ

「最初の反応で決めようと思った。どんな人間か、第一印象が大事だからな。そして、そなたは私に期待にこたえる形となった――この娘なら、と思ったのだ」

それが、正妃候補とした理由？ 侑家に対抗するための？ それとも、他にも・・・？

「それだけなのか、と思ったか？ 他にもある。侑家の他にも、有力貴族たちが自分の娘を正妃にとその座を狙っている。家柄だけが良い娘たちばかりだ。そのような家の娘をあげても、父親が外戚として力をつけ、発言権が増すばかり。国事にまで、口出しされるようなことがあつてはならぬのだ。わかるな？」

「ええ、多少政治の世界はわかるつもりよ。そのために、家柄と機転のきく娘がほしかった、というわけね？」

「それが大きいだろう。だが、それだけの娘なら探せばいるだろう。私は、鈴音だからこそ、そばにいてほしいと思っている」

――私だからこそ、そばに？ その意味は、どうとればいいの？ 勘違いしちゃうよ、紫蘭。もしかしたら、帰れるかもしれない日本。帰れるかも、という　一縷^{いちる}の望みを持つてるのに、違う望みを持つてしまったらそのとき、私はどうしたらいいの・・・

「どうかしたか、鈴音？ 気分でも悪いのか？ すまない、話を詰め込みすぎたか。今日はここまでとしよう、ゆっくり休むがいい。・・・不安に思うことがあるなら、相談くらいはしてくれ。そうしてもらえると、嬉しい」

「ありがとう、紫蘭。お言葉に甘えて、機会があれば相談させても

らうわね。今日は、一緒に食事ができてよかったわ。それじゃあ」

「鈴音、こちらをむいてほしい」

「え？」

紫蘭に背を向けかけた鈴音だったが、声をかけられふりむくと、頬に手をあてられちいさく額に口づけられた。くす、と笑みがこぼれる。不安がよぎった心を、彼はよんだのだろうか？小さな気遣いが、すこしずつ心の中に沁みわたっていき、大きくなっていった。

7・謁見（1）

謁見の日の朝早く、鈴音は目が覚めた。何かあるときには、早起きしてしまふ習性からかもしれない。琉香にいつもより丁寧に体を洗い、髪に香油をいつもより丁寧に付けてもらい、淡い緑の衣装に身を包む。さわやかな色の衣装が、鈴音の優しい心を語っているかのようだった。

「準備よし！あとは、迎えがくるのを、待つだけ・・・」

「緊張されておいでですね？わかりますわ、そのお気持ち。さ、茉莉花茶をどうぞ。気を落ち着けるときに、飲むお茶ですの」

「ありがとうございます、琉香。これで、緊張がほぐれたらいいな」

受け取りながら、ゆっくりとひと口、口に含んでみる。目をつむり、香りを楽しむ。少しではあるが、緊張がほぐされる感じがした。すぐには効かないだろうが、香りと味が気を確かに落ち着けるものであった、というのがあるかもしれない。時間をかけて、ゆっくりと飲みほし、机にそっと置く。

「王太子、紫蘭様お越しにございます。鈴音様、お支度を」

「今、準備整いました。知らせてくれてありがとうございますね、蛭」

「いいえ、そのようなお言葉、もったいのうございます。ですが、ありがたく受け取りますね。では、こちらへ」

蛭の先導を受け、後ろに琉香を従えつつ、紫蘭のもとまでいく。今日の紫蘭はいつもの略装とは違い、王のもとへ謁見するにふさわしいといえる、王太子の正装に近い衣装だった。王家を表す、緋色の衣装が紫蘭によく似合っていた。黒髪に、緋色がよく映えた。

「おはよう、鈴音。準備の方、できているようだな。これから、王のもとへ謁見にいく。なに、父王は気さくな人物だ。そう硬くならずとも、よいぞ」

「おはよう、紫蘭。うん・・でも、やっぱり緊張は完全にはとけないよ。へましないよう、頑張るけど何かあつたら、助けてね？」

「そなたがへまをするようには見えぬが、約束しよう。大丈夫だ。さあ、手を」

紫蘭が手をさしだしてきたので、そつと手をかさねた。緊張のため、やや手が震えていたかもしれない。謁見の間へ、一步一步、歩みを進める。やがて、扉の前につく。ゆつくりと、扉が開かれていく。それは、これからの鈴音の運命の扉をあけるような、おごそかな感じがした。

7・謁見(1)(後書き)

*茉莉花茶・・・リラックスしたいときに飲む中国茶。

明日は、更新をお休みします。

8・謁見(2)

「謁見の間」へ入室し、静かに膝を折り、頭を垂れて王と王妃が現れるのを待つ。そして。

「宋国国王、ちようけい趙慧様、並びに王妃、せんか茜花様おなりにございます！」

ついにきた。王と王妃、初の対面である。胸が高鳴るのを感じながら、王の言葉をまつ。表をあげよ、と静かな声がかかった。ゆつくりと、顔をあげ王を正面からみつめた――威厳に満ち溢れ、慈愛に満ちている人物だった。ついにきた。王と王妃、初の対面である。胸が高鳴るのを感じながら、王の言葉をまつ。表をあげよ、と静かな声がかかった。ゆつくりと、顔をあげ王を正面からみつめた――威厳に満ち溢れ、慈愛に満ちている人物だった。その眼差しの中に今までどれだけのものを、見出してきたのであろうか。

「――拝謁が叶い、望外の喜びにございます。陛下、王妃様。李斉蓮が娘、鈴音にございます」

「よいよい、そう硬くなるな。鈴音、そなたに会えるのを楽しみにしていたぞ。――拝謁が叶い、恐悦至極にございます。陛下、王妃様。李 斉蓮が娘、鈴音にございます」

「よいよい、そう硬くなるな。鈴音、そなたに会えるのを楽しみにしていたぞ。紫蘭があまりに、褒めるのでな。どのような人物かと思つておつたのだ。なあ、茜花？」

「はい、陛下。わたくしも、楽しみにしておりました。いずれ、義理の娘になるかもしれぬ娘です、仲良くしとうございますわ」

につこりと、無邪気に微笑む王妃。王とみつめあふ姿は、長い間培

われいる情愛を深く感じさせた。ありがとうございます、と返答し次の言葉を待つ。

「今まで、紫蘭に取り入ってきた娘たちは家柄と気位だけが、高いだけの娘たちでな。女を見る目を養え、と幼き頃より言い聞かせて育てたのだ。そして、20歳にして、そなたという娘を見つけ出した。今はまだ、候補として暮らすよういつてはあるが、忌憚なくいふべきことがあれば、いうがよい、斉蓮の娘よ」

言うべきことがあればいえ、と王はいったが口元は笑えど目は笑っていないかった。試されている。気さくだ、というのは「王」ではなく、もともとの性格のことだろう。「王」としての顔は、厳しいものだ。息子につけてもよい娘か、試されている。ごく、と誰かのどがなつた気がした。

「———ごいません、陛下。このように、お会いできただけで私は満足にございます」

「・・・そうか。合格だ、鈴音よ！そなたが、分をわきまえず何か申しておつたら、いくら斉蓮の娘といえど、容赦ないところであつたぞ。すまぬな、試すようなことをして。これも王としての責務なのだ」

「お人が悪うございますよ、陛下。鈴音さんも、ごめんなさいね。「控えの間」に斉蓮殿がこられているはずです。そちらへ向かわれるとよろしいわ。今日はお疲れ様でしたね」

「それではな、鈴音。また、会おうぞ。紫蘭、よい娘と会わせてくれたこと、感謝しよう」

王妃も知っていたのだ。知っていて黙っているよう言われたのだろう。が、怒る気にはならない。子を思う親心からだからだ、退出の意を告げられ、全身の力がぬけるようだった。退出する前、深く頭

をさげ最高礼をしてから、紫蘭とともに「謁見の間」を退出した。

「すまなかつたな、鈴音。謁見中は黙っておくよう、言われてたの
でな。ひとりで質疑応答な形で不安であつたか？」

「少しはね。素敵なご両親じゃない。試されるのは当然よ、大丈夫。
早く、斉蓮様にお会いしましょう。もう何日もお会いしてない気分
だわ」

んー、と背伸びをかくしながら、大仕事を終え満ち足りた気分の
鈴音だった。久しぶりに斉蓮に会えることが、とても嬉しく感じた。

8・謁見(2)(後書き)

一日ぶりの更新です 王との対面がようやくできました。次は斉蓮様ですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6705y/>

夢想花

2011年11月27日08時45分発行